

DRAMA かながわ 57

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52（横浜演劇研究所内）Tel. 045-261-4866



今年は連盟50周年！ それはキッカケとチャンス

神奈川県演劇連盟理事長・劇団河童座 横田 和弘

新年 明けましておめでとうございます。
今年は いよいよ神奈川県演劇連盟50周年を 迎えます。
《50年》これは 凄いことだと思います。継続すること
これは力です。ポンと胸を叩き 誇らしげに外へ向かって
威張れることです。

年末には 50周年の合同公演が 待っています。さらに
50年の県演連だからこそ声がかかった 新しき神奈川芸術
劇場の？年度の合同公演も 年内に動き出し 来年のゴール
デンウイークに本番を迎えるはずです。

でも 若い人たち 若い劇団 にとって50周年といっ
ても 実感としてはぴんとこないかもしれません。でも 関
係ないことだとは思わないでください。

50周年に用意されていること それは 決してお祝いや
ご褒美ではないのですから……。

50周年の記念事業は お祭りの性格も勿論あるかもしれ
ませんが それよりも 大きなことは キッカケ チャン
スだと私は信じます。

キッカケとは 勿論50周年を踏み台にして大きく変わ
て行くための キッカケです。もっと演劇の力を 連盟の
力を大きくするための キッカケです。

チャンスとは 県演連の力を 見せ付けることです。演
劇の社会的責任を 他の世界に認知させることです。

最近 不況の名の下に 演劇を取り巻く環境も他人事で
はありません。事実 自他共にその企画には 良いものだ
と評価を受けた「芝居塾」が 今年からはセンターの主催
事業から 県演連の自主事業と変わります。（勿論 セン
ターの大きなバックアップがあつての事なのですが……）
原因は 不況の中 数字です。対象人数にしては予算がか

かりすぎるといことです。

このままで行くと センターを含む 行政からの支援は
先細るばかりです。演博・県演劇フェスティバルへの 多
目的プラザの提供・世界演劇祭・合同公演・資料室……な
どなど 全ての事業に対して 暗い影は忍び寄ってきてい
ます。

もし キッカケとチャンスを旨く 取り込めれば それ
こそが 唯一 我々に残された抵抗なのだと思います。

テーマは 数字です。連盟傘下の劇団数・集客数・劇団
員数・公演回数……

演劇環境を整えるためには 一つの劇団ではだめです。
全ての劇団の底上げが 必要なのです。連盟にかせられた
使命だと思います。連盟にしか出来ない仕事なのだと思
います。

50周年の合同公演には 若い土井君が決まりました。50
周年は これからへの出発点だとすれば 素晴らしいこと
だと思います。県演連には 歴史と経験と力 そして 若
さ 新しさ 全てが揃い 老いも若きも一緒になって《旬》
である舞台を 見せ付けるような活動をしてゆきたいと思
います。

待っていても 何も変わらない。動き出すこと……守り
に廻らないこと……。

こんなときだからこそ ポジティブに！

今年は 大切な年です。

今 記念事業を成功させることで 我々の
継続も力ですが数も 力です。

演劇を 社会的に認知させるような チャンスです。

50周年にむけて

■意気込み

二都物語の冒頭はこう始まる「それはおよそ善き時代でもあれば、およそ悪しき時代でもあった。知恵の時代であるとともに、愚痴の時代でもあった。～人々は真一文字に天国を目指しているようでもあれば、また一路その逆を歩んでいるかのようにも見えた。」私がこの二都物語を選んだ理由は、この物語が現代を連想させる事柄がたくさんちりばめられていることがあげられる。生活であり、政治でありそれをめぐる事件などである。そしてそんな中において自分以外の人のために、何が出来るかを考え、行動する。そんな「救い」のような姿を描きたいと思ったのである。そして、このすぐれた文学には普遍的な人間の感情が表現されている。それは国を越え、時代を越えても、なお鮮度の高い質を持つと信じているからである。

神奈川県演劇連盟の五十周年記念合同公演、私が大いに期待していることがある。それはきっと私個人だけではなく、多くの「若手」と呼ばれている層の人たちがそうであるはずだが。演劇連盟には何十年と続く劇団、そして力ある役者さん、力あるスタッフさんが多くいる。その人たちと一緒に芝居が創れる、交流が持てる、同じ土俵の上で意見を言い合える。こんなチャンスは二度とないかもしれない。劇団という枠を越えた「若手」と「ベテラン」の科学融合、私が「ベテラン」とよばれる歳になった時、果たして同じような景色を見ることが出来るだろうか。いや、見たいと切に願わずにはいられない。この企画にはそんな重要な第一歩が必ずあると思うのである。

近年、演劇というジャンルがどんどん細分化している。新劇、ミュージカル、コメディ、アンガラ、ファンタジー、などなど挙げたらきりがなくらいである。ともすると、我々劇団側としては共倒れていく危険性を大いにはらんだ時代になってきたと言える。そんな中、ジャンルやスタンスの違う劇団同士が集まり、一つのお芝居を創りあげていくことは、地域の活性化や新規のお客様の確保、そして何よりこれからの劇団運営の大きな弾みになるものと感じているのである。私自身小さな劇団の代表として思うところがある。それは、劇団を現状維持のままこなしたいこうとすると、待っているのは緩やかな衰退だけであるということである。それを打破するためにも、この企画には大きな期待を持っているし、よいチャンスでもあると思うのである。

最後になりましたが、神奈川県演劇連盟五十周年記念合同公演の演出という大役を与えてもらったことを心より感謝いたします。 [風雲かぼちゃの馬車代表 土井宏晃]

■アンケートの集計

50周年合同公演へのアンケートは62人が集まりました。集計内容は以下の通りです。

A意見要望

- ①作品：喜劇2名・明るい作品2名・ミュージカル・オリジナル作品3名・子ども向けするもの(着ぐるみなど)・和物・髻物・コメディ・環境問題を扱ったもの・マリーアントワネット群れ・各劇団のカラーをはずした作品・サラリーマンの日常を描いた作品
- ②出演者：学生演劇員も参加させて・50周年として参加者を公募・キャスティングはオーディション・一般参加や地域との交流・創立メンバー総出演
- ③ほか：他劇団との交流を深めたい・情報交流ができればいい・元気になる・経験をつみたい
- ④稽古：練習方法を各劇団で持ち時間を作って・シーンの告知・基礎的なことを教えて・向上したい・エチュードをとり得れるなど公開練習・場所はランダムで・子連れは可能
- ⑤演出家：プロの演出家を希望・県にゆかりのある演出家希望

B作品名

袴垂はどこだ・居残り佐平次・森は生きている・裸の王様・王子とこじき・りぼん・カボチャのオリジナル3名・泣いた赤鬼・パイパー・冒険者たち・真田風雲録・11ぴきのネコ・見よ、飛行機の高くとべるを・海の沸点・ぬげがら・井上作品・黙っていかせて～Let's me go～・明日・わが町

■50周年合同公演 『二都物語』(仮)

実行委員募集!

50周年記念公演の演目が合同公演実行委員と演出の土井宏晃氏により選出されました。タイトルは『二都物語』(仮)。これはチャールズ・ディケンズ作の小説『二都物語』を土井宏晃氏が自ら舞台用に書きおこした脚本です。50周年合同公演の演目に『二都物語』(仮)が決定するまで実行委員は何度も話し合いを重ね、考えてきました。時代劇?ミュージカル?登場人物は何人?上演時間は?50周年合同公演にふさわしい演目とはいったい何なのか?多くの台本を何冊も手に取り、読み重ね、意見を出し合いました。その様々な思いを演出の土井宏晃氏の手により新しい作品を生み出すことで解決し、今までにない新しい舞台を上演することにいたしました。若い演出家の新しい作品で50周年を彩りたいと思います。これで12月の合同公演へ向けて大きな一歩を踏み出しましたが、これからもっともっと多くの劇団員の力が必要となります。あなたの力を貸していただけませんか。合同公演実行委員を募集します。あなたの力が必要です。よろしくお願ひします。

[演劇プロデュース『螺旋階段』 緑慎一郎]

はじめまして
ラゾーナ川崎プラザソルです。
わたしたちは、劇場として
神奈川県演劇連盟に加盟しました。

LAZONA
KAWASAKI
Plazasol

なぜ、神奈川県演劇連盟に加盟したの？

私達は、JR川崎駅に3年前にオープンした複合型商業施設「ラゾーナ川崎プラザ」内5階にある「プラザソル」という劇場です。ホールは多目的な用途に対応が可能で、演劇は勿論、音楽、ダンス等、あらゆる催し物を扱う団体が利用し、シーズンを問わず多くのお客様が訪れます。その中でも2009年は自主企画として「川崎インキュベーター合同公演」「プラザソル3周年記念公演」と題して、2本の演劇公演を上演しました。劇場の運営に携わっている職員の殆どが、神奈川県内での演劇カンパニーの中でスタッフ、役者として携り、現在も演劇活動を続けているメンバーで構成されています。という事でこの度、ラゾーナ川崎プラザソルは川崎、横浜、ひいては神奈川県の演劇文化の発展に貢献したいという総意のもと、劇場として県演連に加盟する事になりました。

設備も料金も、演劇に特化した劇場です。

商業施設の中にありながら、プラザソルは純粋な営利を目的としている劇場ではありません。運営は川崎市文化財団と協同で行っている為、施設を利用する際は「催しものが文化、芸術、それに類するもの」であれば、通常の芝居小屋よりもかなりの安価で利用する事が可能です。公共施設のように抽選形式ではないので、条件が揃えば仕組み、バラシ、リハーサルを含め余裕のある日数を抑える事も可能であり、県内、都内からは噂を聞きつけ、毎年数多くの劇団が利用しています。交通の便においては、神奈川と東京を繋ぐアクセスポイントとしても、非常に良い立地条件である事がメリットです。この利便性を、神奈川県を活動の拠点とする劇団に対して、更なる選択肢の一つとして「ラゾーナ川崎プラザソル」をおススメします。

今後の事業のラインナップ

プラザソルで自主企画として演劇公演を行う際、参加者の多くが一般募集は勿論、劇場の利用を通じて知り合った団体へ依頼をするという形式が主になっています。(脚本、演出を含め)特に、プラザソルを拠点としている文化芸術共同体「川崎インキュベーター」は毎年恒例として合同公演を行っていますが、それを通じて団体同士の交流を深め、各団体の更なる活動の発展に繋がっています。そして毎月行われている演技/制作WSも人気コンテンツのひとつです。

2010年

- 1月 カプセル兵団吉久直志青少年向け演技WS/制作WS
- 1月 [音楽] マンデージャズナイト
- 2月 [演劇] 川崎インキュベーター合同公演『ニセモノニンゲン』
- 8月 [演劇] SPIRAL MOON 秋葉舞滝子演出作品 演目未定
- 11月 [音楽] オータムソルフェスタ

住所：〒212-8576 川崎市幸区堀川町72-1
ラゾーナ川崎プラザ5F
TEL: 044-874-8501 / FAX: 044-520-9151
E-mail: info@plazasol.jp



<http://www.plazasol.jp/>



『朱雀の翼』を終えて

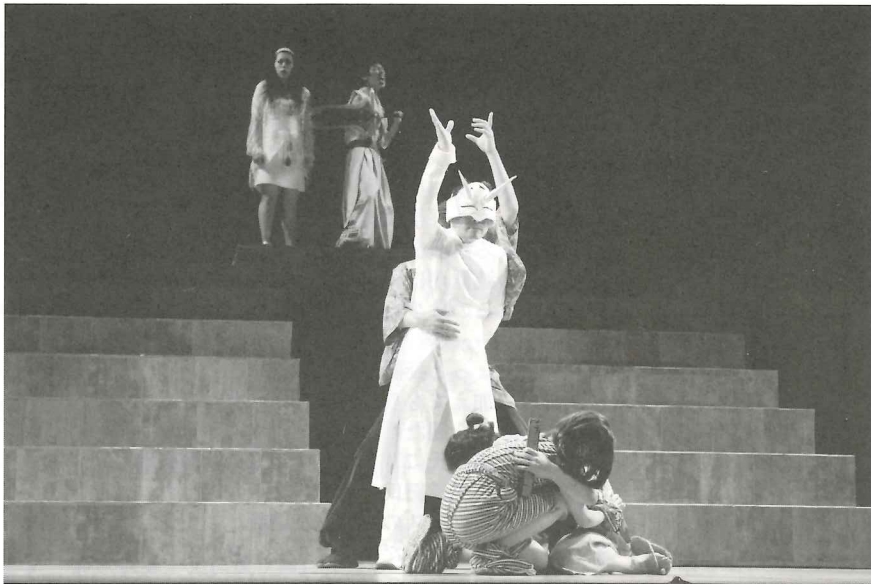
まず紙面をお借りして、この企画に携わって頂いた大勢の方に感謝の言葉を述べたいと思います。本当にありがとうございました。人が生涯の中でどれだけ「ありがとう」という言葉を言えるかがその人の幸福度を決めるのなら、この企画が決まってからの約一年近くの時間がどれほど私にとって幸せだったのか、またどれだけ濃い時間だったのか計り知る事は出来ません。自劇団のみの公演では成し得なかった企画が色々な世代、色々な技量を持った人々が力を出し合う事によって出来上がる。合同公演の意義をあらためて強く感じました。損得勘定なしに作品作りに協力していただいた方々にはいづれ何らかの形で恩返しさせていただこうと思っております。

さて、『朱雀の翼』という作品についてですが、企画当初考えていた構想の三割位しか達成することが出来ませんでした。まずは稽古場の確保。当初は1~2ヶ月程度工場のような高さがある稽古場を使い、実際のセットを組み立て実寸で稽古をしたいと考えておりました。更に舞台のデザインは建築関係の学生にお願いし、舞台関係者以外の視点から作品の世界観にアプローチしてもらいたいと企画しておりました。しかし、プロットの完成が遅れたためプレゼン用の資料が整わずデザイナーの招致が遅れ、時間の関係上自前の劇団員が俳優とデザイナーを兼任することになりました。慣れないデザインという仕事に初めての大ホールの舞台。普段公演を行っているキャパ100程度の小劇場とは勝手が違い決定稿が出るまで相当な時間を要しました。ただ彼の努力によって面白いセットが出来上がったと思います。しかし劇場備品を多用する設計にした関係上、公演前に実際のセットを組むという事が不可能になり、

工場を稽古場に利用する利点が無くなり、予算とのバランスを考えて工場を借りるプランは断念しました。その結果、コミュニティや集会所を点々とする事になり、毎日のように通ってくる俳優陣には迷惑をかけることになってしまいました。衣装についてもデザイン学校の生徒さんなどにデザインを依頼しようと計画していましたが、舞台同様プロットの遅れから依頼を断念。やはり劇団員が担当することになりました。40人強の出演者、また一人数役こなし、時代設定が未来のため既製服を使うわけにはいかず全て手作り。これもまた担当者が抱え込む結果となりかなりの負担が生じました。しかし舞台・稽古場・衣装それぞれに手や知恵を貸してくれる方々に支えてもらい本番ではイメージしていたような世界が描けました。逆に達成することが出来たのは、劇中で使用する楽曲をオリジナルで作曲・製作していただいた事や、ご指導いただいた上で生演奏出来た和太鼓、作品に華を添えてくれた殺陣の数々をご指導頂いた事などです。アンケートにもその点は指摘があり、それぞれの団体や個人が得意とする力を寄せ合うことで出来た素晴らしい舞台だとお褒め頂きました。

最後になりましたがこの芝居の完成は、この大変な企画に尽力して下さった舞台監督をはじめ舞台装飾の提案から施工まで請け負ってくれた出演者、舞台の核となる巨大な仏像や小道具の数々をデザインし製作まで行ってくれた友人、表方を手伝って頂いた方々や盛り上げるために参加して下さった大先輩の方々、その他大勢の応援や手伝いをしていただいた方々に支えられてのものです。本当にありがとうございました。

[G/9-Project代表 佐藤典久]



神奈川県演劇連盟合同公演・G/9-Project

『朱雀の翼』 作・演出／仲尾玲二

2009年12月19～20日

於：神奈川県立青少年センター・ホール

一つの劇団が中心になりいろいろな劇団や個人からの参加者を募り公演を持ったのが今回の合同公演のスタイルだ。朱雀の翼の出演者は子ども(10名)から年配者まで40人を超える。青少年センター大ホールで芝居を打つこの企画に手を挙げ中心になる劇団はそれなりのパワーと挑戦する意思を求められる。そんな冒険があって幕を開けることになるのだから、敬意と期待に胸ふくらませ劇場に足を運んだ。幕が開き舞台が進むにつれて私の心に何ともやりきれない思いが広がってくる。舞台からはその意気込みだけでは魅せられない道のりを痛感する。幕開きから役者の台詞は音としては聞こえるが何を語っているのか聞き取ることが難しい。だから筋立てがいつになっても見えてこない。せめて場面の展開により意味することが判断できれば良いのだが、劇中の主要な役どころの台詞からは何が事件でそれがどう本人を含め人々に作用し発展しているのかすら解らないまま時間が過ぎていく。劇中で意外と時間を費やす殺陣も現実味がなく周りに影響を起こさない。衣装や細工のない小道具は人の命を殺めるにはいかないから現実味がない。やがて私は物語を紐解く楽しさどころか、わからないまま椅子に埋もれ時間を費やすから疲労が生まれ舞台からは心が益々離れていく。回り舞台を動かし、俳優は一生懸命に舞台を動き回っているだけに尚更である。なぜだろう？私は演劇の原点に

かかわる疑問符を投げかけてみたい。出演する俳優にもすべてを背負う演出にも。なにを舞台で見たかったのだろうか、なぜ、この舞台に参加したのか、この物語の何が好きなのか。俳優は役を生きて行動するため何を持って舞台に立っていたのか。履物一つにも疑問符を持たないといけない。若くても経験が少なくてもこの舞台に出演した者たちの意気込みで、生きていく人たちの勇気や愛情を言葉としてではなく、舞台から湧き上がるようなものを見せてほしかった。お話の終盤で「他人を無視して好きに生きるから鬼が出てきた」「鬼は作られた殺人兵器で鬼はここ(心)にいる……」「おのが眼でみる、そこに新しい未来がある……」という言い回しがあるがこんなに素敵な言葉が白々しく聞こえてしまわないように。芝居は舞台に立つ俳優たちの心を通して観客に込みわたらせる。それが言葉だったり涙であってほしいと願ってやまない。舞台に立つ俳優の気持ちの高ぶりがやがて周りを動かし舞台に命が生まれると思うのだが。もっと時間をかけてたくさんの疑問符を投げかけながら稽古をし舞台を作り、幕を開けてほしかった。少し辛口になってしまいましたが次のチャンスにチャレンジする若い皆さんの成長を楽しみにしています。

【団のぼる】

劇団きさく座

「それとなく鉄幹」 作/津布久直子 演出・補作/樋口晶子

2009年9月27日 於：平塚市中央公民館大ホール



平塚の演劇フェス(以下フェス)は昨年足運び、今回は初めてではなかったのだが、開場時間よりも早く会場に着いてしまった。開場し、それでも時間があつたので、ホワイエでんびりしていると、演劇集団群生の演出家・西山慈恩氏と会い、会ったついでに演博に対するご意見(愚痴?)を頂いた。そういえば氏と演博で一緒にさせて頂いたのは、今回出演のきさく座を通してだったと感慨に浸る。氏はきさく座を離れ群生を旗揚げしたが、新しい劇団が派生するほど、きさく座は大きくなったということだろうか?

さて、今回のきさく座の演目は「それとなく鉄幹」。これまでも何度か上演しているという、きさく座のレパートリーなのだが、

私は初めての観劇。鉄幹の納骨前夜に妻・晶子のもとに、かつての愛人・登美子、そして前妻・滝野が訪れ、思い出話を花を咲かせる。高橋氏、樋口氏、佐々木氏の安定した演技で安心して観ることができ、また、生演奏もあり、興味を引く演出もあった。しかし、後述する終演後の講評で、河童座・横田氏も仰っていたが、下手の舞台装置がほんの一瞬しか使用されないのに、はじめから舞台上にあるのは少々不自然と思われた。また、取って付けたような回想(唯一鉄幹が現れるシーン)、娘・藤子が現れるラストシーンにはちょっと疑問が残る。後で聞いたのだが、やはり作家に後から付け加えてもらったのだそう。それを聞いて、以前に上演されたものを観たくなった。再演を望む。

終演後に高橋氏に誘われ、フェスの講評会に参加させてもらった。講師として横田氏と山田ちよ氏が呼ばれ、1時間をかけて2日間にわたるフェスの4公演を講評。ただ単に劇団が集まって、それぞれに上演するだけではなく、意見交換を通じた交流ができるのはこういったイベントならではの事。今年は集客も過去最多だそうで、フェスがイベントとして大きくなっていることを感じる。既に来年が楽しみである。 [劇団蒼生樹 関口素実]

横須賀市民劇場プロジェクト

「はるなつあきふゆ」 作/別役実 演出/羽賀義博

2009年10月9～10日 於：横須賀市民文化会館大ホール



別役実作品についてはよく不条理劇だとか非日常性とか言われ、このことについて分かったような分らなかったような解説的文章も読んだことがありますし、別役さんの「非日常の中からドラマが生まれる」と言うよう

な文も読んだ記憶がありますが、私の勝手な解釈になりますが今は、日常的になってはいけないうもの日常化しつつあり、またそれを気づいていない現実をどう捉えるか。

トップ「はる」での首吊り用のロープ、そしていつでも首が吊れるようにしたこと。ラスト「ふゆ」での遺体の搬入、他人ごとのような身内、全く関係ないような弔問者をどう解釈したのかと、目先だけでは各景夫々別役流におかしさを捉えたシーンになっていきますがどう解釈されて上演されたのかと……。

首吊りロープについては他の作品にもありますし、同景の花見用?のゴザ上に知らない他人も上がり、「個」から「集団化」していくなかで「人」についてなどなど……。

老人のせいか音としては聞こえてもセリフとしては半分程度しか聞こえなかったことが残念でした。劇評にならずゴメンナサイ。古い作品でしたが「失われし時、失われゆく処」の表現は十分に響いています。 [劇団かに座 田辺晴通]

「演劇資料室」の案内

■演劇に関する相談：劇づくりのいろいろな問題(演目の選定、演出、舞台照明、音響効果など)をボランティアスタッフがご相談にお応えします。■蔵書や資料の紹介：日本と外国の戯曲集、演劇書、上演台本、演劇雑誌、神奈川県と全国各地の公演資料(パンフレット、チラシなど)を公開しています。

場所：青少年センター2階 開室時間：火曜日～日曜日9時～17時(月曜日休室)
お問い合わせ電話：045-263-4400(青少年センター代表番号)
内線 5301(演劇資料室 担当：荒井、山元)

※ボランティアのスタッフを募集中：経験不問。

風雲かぼちゃの馬車

「大奥悲恋 ～18 century boy meets girl～」

作/南瓜良成 演出/土井宏晃

2009年8月1～2日 於：相鉄本多劇場



劇場に入ると、中はシンプルなセット。上手と下手に舞台がひとつずつ。真ん中には高い台。だったと思います。

まず開演前に注意事項の説明があったのです。……が！これが斬新でした！

『ただ説明するのはつまらない』…と、出演者が諸注意を替え歌にして説明する…というものでした。(場内では携帯の電源を…というあれです)歌って踊って前説をするなんて、目からウロコでした！そして場内があたたまったところでお芝居スタート。

芝居はもちろん、殺陣あり、歌あり。今回は和太鼓も使っていました。笑えたり、せつなくなったり、しみりしたり。ひとつの舞台にたくさんのものが詰めこまれていて、観ていて飽きず楽しかったです。

いつ見てもパワフルな役者さんた&息の合った照明・音響ですが、『たのしそう』で『たのしませたい』という気持ちがあふれる作品でした。

ひとつ。残念だったのは、私が座っている席では客席の構造上、上手の芝居がほぼ見えなかったことです。これを除いては、とてもよかったです。パワーをもらいました！

最後に。カーテンコールで役者さんたちが1輪ずつ花を持って出てきて、ランダムにお客様に渡していました。終演後のロビーでは、お花をもらったお客様がとても喜んでいて、それも『素敵なアイデアだなあ！』と思いました。

[劇団河童座 山本悦子]

劇団麦の会

「第5回★麦畑★秋の大収穫祭 ～工事中につき、ご迷惑をおかけします～」

作/岡本みゆき・池浦典子・榎本かおり 他 演出/古澤亮・三嶋洋一・小金井敏邦 他

2009年10月24～25日

於：県立青少年センター・多目的プラザ



この所すっきり多目的プラザでの公演スタイルが身につけて来ているようです。今回は特にサブタイトルの“工事中”に引っかけた本格的な足場を使った舞台作りが目につきました。シートも張り、その一部分にはスクリーン組み込み、作品名を映し出すというこった作り方もしています。足場には「立入厳禁！」等の札まで下げ工事現場を思わせる工夫も……。一方、役者が主に使う舞台の方も二重を二段にして、観客から見て前の客の頭が気にならない観やすさも工夫しているのである。それに何より気合いが入っているのが、「書いてこいよ～」の一言で、十数本もの作品が書かれたというから、皆の「やる気」満々さが分かります。なんともうらやましい

限りであります！ そのうちの六本を厳選したというオリジナルのショートストーリー作品作り大当たりという事でしょうか。演出でも五人が担当と頑張っております。作品的には課長役の役者さんが、作品のつなぎ的役割を果たして面白い味を出していました。又、三本目？と五本目？の女の人の座る位置を逆にした配置を見せ違う作品ながら、共通点を作った面白さの工夫もなされていきました。最後の作品のガイド役の女優さんの背中に剣が突き立てられている姿にはなんともおかしかったです。それに最初は頭の帽子に何かついてるなどと思っていたのですが、それがよくよく見ているうちにナイフが突き立てられているんだと確認させられ、笑わせられました。皆で作品作りに大いに係わり楽しんでいこうという“麦”の姿勢が大いにハッキリされた“秋の大収穫祭”とても好感が持った公演であったと思います。今後ともこの路線を定着させ、「湯けむり……」路線と合わせて行くのであろうと大いに期待させられます。

蛇足ながら一言、もう少し足場を利用した場面を作ってもよかったのでは。三回程度ではちょっと少ない感じがした次第。でも、とても楽しく観られました。 [劇団葡萄座 羽生昭彦]

劇団こゆるぎ座

小田原大手前「終戦物語」 作/後藤翔如 演出/楠田正宏

2009年10月24～25日 於：小田原市民会館大ホール



「すごい！」正直驚きました。軽く1000人は入るであろう会場はすでに満杯に近く空席をさがすのもたいへんでした。2回公演の集客力に脱帽です。なんとなく見渡すと素朴な地元根ざした劇団なんだと言う事が観客層

からわかりました。小田原の片田舎の町の家族で営む畳屋の一家の物語。仕事が生活のすべての畳職人「伝吉」と親の仕事を継ぐのを当然と修行に励む息子「勝男」。黙々と家事をこなす職人の女房「春江」。ちょっと色を副えた配役は勝男の妻「淑子」。彼女は当時としてはインテリで師範学校(先生になる為の学校)を出ている。しかも実家は代々の軍人一家。幼馴染の勝男に自分から望んで嫁にきた。そんな設定。そんな家族の昭和20年1月から21年11月までを描いている。時は太平洋戦争末期、戦局は混沌とし、鍋釜まで抛出し、戦闘員不足で中年以上にも「赤紙」がくる。日々、空襲からの非難騒動や、防空演習、身内の若者が特攻隊員として散っていく。そしてとうとう「勝男」にも「赤紙」が来る。どれをとっても天地がひっくり返るようなでき事なのに、怒ったり泣いたりしながらでも遅く日常生活が続いて行く。きっと、当時の庶民生活ってこうだったんでしょね。終戦。空襲に怯える日々は終わった。でも、ドラマのお約束のように「勝男」の戦死報告。ショックで倒れ不随になる「伝吉」。先の読める私は、さあこれからだよな。一家を切り盛りしていく、「淑子」さん。あなたの出番です。その為の師範学校出なんだから。物語の始めから決められた展開。「教師になって新しい日本を背負う子ども達の教育に人生をささげます。」なんて言葉で終わるよな…。でも物語はそんな月並みな展開をしなかった。浅はかな私を優しく窘めるように。もっと素朴に、もっと暖かく続いた。戦死と伝えられた「勝男」が生きて帰って来る。(当時こんな間違いも結構あった)それとともに「伝吉」の病状も変化して行く。一家にまた元のささやかな幸せが戻るであろう事を観客に伝えながら、幕が下りる。激動の時代を生きたが、ヒーローは1人も出てこない。気負いもなく、普通の家族の戦中戦後の日常をたんたんとして表現した作品でした。波乱万丈を芝居に期待すれば物足りないかもしれないが、「回覧板を届けたついでに、のんびり茶飲み話をして帰る」ようなこころ良さを与えてくれた作品でした。 [劇団ひこばえ 儀間鈴江]

劇団河童座

「山月記」 作/中島敦 脚色・演出/横田和弘

2009年10月31～11月1日 於：県立青少年センター・多目的プラザ



中島敦「山月記」。国語の教科書に掲載されていた有名短編小説の舞台化です。この作品は元々好きですが、今回は太極拳とダンスとのコラボレーション舞台ということで、どのような形になるの

か楽しみにしておりました。

主人公の袁惨や、李徴(人)役には、ベテランの河童座役者陣を、また、李徴(虎)役として中国武術の指導者を、そしてオリジナルキャラクター・李徴の妻/麗華役にダンス講師をキャスティングし、出演者それぞれの得意分野に合わせた配役。勿論、他ダンサー陣も、躍動感溢れる舞台作りで一役も二役も買ってました。

劇中のストーリーとしては、私達がよく知る内容の本編が終わり、その後の知られざる物語として、袁惨が虎となった李徴のもとに、その後、彼の妻・麗華を連れてくる…というエピソードが追加されていました。気難しい夫と、そんな彼を一途に愛する妻が月明かりの下、二人が再び出会うという場面は、中でも特に強く印象に残っています。伴侶としての互いが、揺れ動く気持ちをすれ違いながらも絡めていく様が二人の動きのみで語られ、キャストの鍛え上げられた身体も手伝い、大変美しかったです。個人的には、ここで太極拳がきちんと「表現」として成立していた点に大変驚きました！

また、そんな妻にも冷たい態度をとり続ける李徴に、主人公・袁惨が厳しく叱咤する「何故、お前は(李徴は)虎になったのか」という独自の解釈にも、非常に好感が持てました。

元々の原作の良さに加え、(個人的には初観劇の)河童座芝居+横田演出を堪能させていただきました。60分という短い時間も丁度良かったと思われま。素敵な小品を楽しむ事が出来ました。

[劇団やぶさか・海老原あい]

劇団蒼い群

「ダルマとタスキと白い手袋と」 作/別府寛隆 演出/日和小春

2009年11月7～8日

於：横須賀市立青少年会館3Fホール



クイズもどきの作品タイトルに「選挙の話か!」と誰もが思う通り、チラシのサブタイトルがこれを親切に解説してくれている。『……とある小さな地方都市の市長選挙。現職市長と生活者ネットワークの女性闘士の一騎打ち!』と。横須賀市長選挙も現職市長と新人2候補の三巴選挙となり、いまどきの最年少候補を市民は選び、また市民の多くはチェンジの風を感じた。似たり寄ったりのストーリー展開かと思いきや! ? だっこいそうではなかった。

現職市長・山村しんたろう(村田次郎)は楽戦と見込まれていたが、生活者ネットワークの新人女性・麻子(延田知香)の立候

補人気が高まり、突然、山村は立候補辞退を言い始めるところからはじまる。演出者の日和小春さんに関心を持ったが、当日パンフレットを拝見し作者・別府寛隆氏だと知った。開幕前から、劇団蒼い群としては久々に活気を感じさせる雰囲気醸し出していた。劇団が、別府氏に書き下ろし作品の提供を依頼したことが、地域演劇に失望しかけていた別府氏を鼓舞し演出をも引き受けたことが大きな原動力となって熱いエネルギーを感じさせる舞台に高まったと言える。不特定多数の客一人の私は、30代から今日70代に至るまで飽きるほど選挙運動に関わった者なのでいささか選挙運動裏話的な説明台本にやや疲れた次第。38年前に「劇団蒼い群」を設立したメンバーの一人が劇評担当指名を受けて、なんとも心苦しく心重く考えていたが設立以前の劇団創作舞台時代に顔見知りの村田次郎氏、小川美紀子さんの成長ぶりや、初めて舞台を拝見した延田知香さんの感性の美しい演技に注目した。ラストの親子の葛藤部分に台本の物足りなさを感じた。

[横須賀市民劇場プロジェクト 吉本敏克]

演劇プロデュース『螺旋階段』

「幻壁」 作・演出/GREEN

2009年11月14～15日 於：小田原市生涯学習センターけやき



初めて見に行く劇団だったので、楽しみにしていましたが、正直期待外れの印象が残りました。

ストーリーは2人組の探偵に、失踪した小説家の捜索を依頼してくる女性編集者。その彼女に恋をし、振られた小説家の前に現れた、彼の作品から抜け出して来た刑事達。刑事達は同じく作品から消えた殺人事件の犯人を捜索するのだが、その犯人は創り手である小説家も意図していない人物だった。現実世界と虚構の世界。そこに存在するのが、タイトルになっている「幻壁」。2つの世界を隔てるこの壁が、自分の作品の登場人物である女性に恋をしたが為崩れた事により、現実と虚構の世界が絡み合い、やがて彼を殺しに犯人が現れるという流れのサスペンスコメディ。

今回は会場の印象がかなり自分の感想に影響を与えました。会場が体育館のような作りになっていて、客席に着いて舞台を見た時に、集中しづらいかなと感じてしまったのですが、その悪い予感が当たってしまいました。舞台装置の構成も要因としてあるのですが、台詞が聞き取りづらい場面が多々ありました。とくに舞台奥での芝居では、台詞が中で反響してしまい、こちらまで伝わってきませんでした。役者陣はそれを意識して演じていたのかわかりませんが、台詞を待つことでテンポや間も延びてしまい、若干のストレスを感じてしまいました。おそらく今後も使う会場だと思うので、この辺は考えた方がいいと思われます。また、登場人物に関して、キャラクター作りが中途半端に感じられました。コメディとしての部分を個々のキャラクターの持つ面白さに頼っていた感があるのですが、その為には各キャラが突出したものを演じないと、面白さに厚みを増さないと思うのですが、今回はそこまで至って無い印象です。全体的に、まだこなれてなく、あと少し時間があればという思いが残りました。ただ、スライドやスモークマシンといった効果を使った構成や、脚本が持つ面白さは感じました。次回は演劇博覧会にでるとの事。博覧会での彼らを改めて見てみたいと思っています。[劇団麦の会 古澤 亮]

劇団かに座

「高さ彼物」 作/マキノゾミ 演出/馬場秀彦

2009年11月20～22日 於：関内ホール・小ホール



動かない…動かない…まだ動かない。これが感想といわれて最初に思い出す言葉だった。

言葉の妙や役者の台詞回し、テンポや間など絶妙な引き込みがないと集客力が途絶えて「長い…」と観客は素に戻ってしまうものである。前半の半分は座り芝居。言葉で物語りは展開していくが芝居が展開を感じない……自分も芝居屋なので座り芝居が見る側にとってかなりツライことや脚本の難しさは身にしみているので、さぞこの芝居を作り上げるための苦勞されたのではないだろうか? 大切な友人を失くし自分を責める東京の少年。偶然事故現場付近で出会った元高校教師宅に身を寄せる少年。小さな町のごくありふれた家族と町の人々が織り成す人間模様。確かにありふれたらしく静かに物語りは始まっていく。

しかし前半とは打って変わり動き出す後半は元高校教師の「ありふれてない」物語が展開していく……ここにマキノゾミ作品の骨頂があったのだ。情熱に溢れた高校教師が教職に自ら終止符を打った理由が解き明かされていくのだがここにタイトルの「高さ彼物」が秘められていた。この? 末には思わず「そうきたか」と苦笑いすら誘われた。この「高さ彼物」は作者マキノゾミが山口瞳著「小説 吉野秀雄先生」を参考に書いた作品といわれていて「肩たばこ集め喫へれど志す高さ彼物忘れしや」という1946年頃、教え子の山口氏が詠んだ煙草の歌を受け、教師であった昭和の歌人・吉野先生の短歌の一説で、「高さ彼物」とは自分にとって何なのか……答えは観客ひとりひとりに委ねられた作品であったと思う。また「師」とはなんなのだろう……とも考えさせられる作品でもある。役者の技量を問われる難しい舞台ではあったが、しっかりと組み込まれた舞台と説明がなくともわかる土地柄を表現した自然な方言がこの芝居にホッと温かみをもたらしていたと思う。パンフにキャスト名だけで役柄記載がないので、どのキャストが誰はわかって何の役柄だったかわからないのが残念だが、誰よりもひょうひょうとしたおじいちゃん存在がこの物語を柔らかくしてくれた……というか「オイシイ役」だった(笑)。

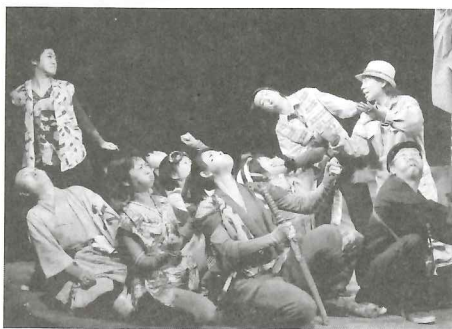
役者・演出泣かせの座り芝居の難しさに自分ならどうしただろう……? と首を捻りながらの帰路は行きよりも寒さを感じなかったのは芝居の温かみの余韻だったのかも知れない……。

[劇団こゆるぎ座 Shiny]

劇団川崎演劇塾

「十一ぴきのネコ」 原作/井上ひさし 演出/渡邊綱男

2009年11月21～23日 於：相鉄本多劇場



そういえば20周年の多摩市民館でもこの芝居観たし、劇評担当したよオレ。今回は相鉄本多劇場が会場、狭い舞台に工夫を凝らし、道具はおかず役者と観客の想像力が舞台をお膳立て。新しい顔がどんどん出てきて活気

ある舞台が展開している様子は、今の塾の勢いを現していると感じた。いつも中心で精力的な演技の藤田るみが、控えめなにやん次を演じてこれがまた新しい味がした。仲間11匹と老ネコ1匹で住みにくくなった都会を捨てて、大きな魚の棲むという湖を目指して旅に出る。ハラペコや道の遠さを仲間との触れ合いで元気を回復、なかほどではそれぞれの生いたちや境涯を歌入り踊り付き

でたっぷりと聞かせる。やっとのこと無事に湖に到着、大きな魚を射止めて空腹は解消。これからはハッピーな村の生活が……と思いきや、残酷な結末が待ち受けているとは。

井上ひさしの作品は、どれも社会性が窺われており、痛烈な社会批判が作品を貫いている。ここでは「環境破壊」という人間自らも生きている基盤への無謀な攻撃が、この星に住むすべての生き物への犯罪、というメッセージなのか。この結末と異なる結末の作品も見ているが、こっちのほうがズバツと切り捨てている印象が強い。

先ほども触れたけど、新しい顔が多く、若くて勢いがあってとにかく元気に舞台を跳ね回るので、それはそれで楽しい限り。出演者全員が歌って踊って演技して、でも前半はちょっと説明過多の印象だった。

この原稿を書いている段階で塾の代表変更が伝えられた。小川雅功氏は塾を卒業、渡邊綱男氏が新しい代表に就いたとのこと。これからの活動に注目したい。

[劇団麦の会 山元洋一]

劇団「横綱チュチュ」

「アラの光風」 作/菱倉あゆみ 演出/団のぼる

2009年11月21～22日 於：杉田劇場（磯子区民文化センター）



22日11時の公演を観ました。途中の電車の中に横綱チュチュの観劇と思われる親子連れグループがいたりして期待が高まりました。会場はアットホームな雰囲気に入れ、ほぼ満席でした。

横綱チュチュの公演を拝見したのは初めてでしたが、子供を対象にした芝居づくりではなく幅広い年齢層に向けたものになっていました。活気を感じられる劇団で、熟年から子供までが和気あいあいと楽しそうに演じていました。年齢層の偏っているわが劇団としては羨ましい限りです。

舞台は簡素というかシンプル、でもわかりやすく、照明もきれいでした。舞台だけではなく会場全体をうまく使っていました。音響はちょっと邪魔に感じられたところがありました。台詞にかけるときはもう少し落としたほうが聞きやすいと思います。

お話はオリジナルのようで、近頃よくあるというか、ありがちな話、簡単に言えば新住民と旧住民の対立とその和解でしょうか。それにいろいろな問題をからめていました。絡め過ぎという気もしないではないし、それぞれの問題に関しては単純にし過ぎいう気もするのですが… 悪い人はいない、楽しい心温まる、でもこれから先、お祭りという興奮が去った後はどうなるのかな、とちょっと心配が残る筋立てでした。

最後のお祭りシーンは盛り上がり、クライマックスで終わるといのはうまいもっていきかたでしょうね。祭りは人を高揚させます。私はなぜか祭りを見ていると切なくなります。

太鼓や踊りの練習は大変だったでしょう。プロはかなりの時間をかけてきちんと習得してから芝居に持ち込むと思いますが、アマチュアでそこまではなかなかできません。あの人数でよくこなしたと感心します。皆が楽しんで舞台上に立っているのがお客によく伝わり、気持ちのいい芝居でした。また見たいと思います。

[劇団きさく座 佐々木登志子]

横浜小劇場

「ともだち」 作/木庭久美子 演出/高橋弘子・岡崎多延子

2009年11月21～22日 於：県立青少年センター・多目的プラザ



この作品は木庭久美子さんの代表作とも言われる作品であり、この劇団で上演されています。「人の老いと死」について正面からとらえたこの作品は悲しくもあり、寂しくもあり胸がいたくなる作品です。あつという間

に年老いてしまい、そんな自分が何かやり残したことはないかと振り返り自分自身を評価し始めてしまう。実はそこから不幸が始まってしまうのがわからない老婦人たち。どこにもいるような人達をそのまま舞台にのせることの難しさがある作品とは感じていましたが、今回の公演を見終わったあと原作をもう一度読んでみましたが、いくつか原作と違った工夫がなされていたので感心しました。お芝居とは人それぞれの生きてきた世界・歴史を切り取ってお客に見てもらおう再現ドラマのことであり、時には観る方も作る方もいやになり疲れきってしまうこともあります。今日のお芝居はより現実に近いだけにひっぱり込まれて観てしまったいい舞台であったと思います。

[劇団蒼い群 村田次郎]

横内謙介氏との交流会に参加者を募集

県文化課から提案頂き、[YOKOHAMAガチンコ編]ドリル魂（県立青少年センターホール）観劇&横内謙介氏との交流機会が開催されることになりました。

開催日時は2月27日（土）1時開演の部、交流会は観劇後にセンター内の会場です。神奈川県演劇連盟所属の劇団員30名をご招待。（観劇のみを招待するものではありません。）

申込は：劇団単位で、劇団名・個人名を付記して2月10日までに横浜演劇研究所にメール若しくは045-261-4865（FAX）までお願いします。一応先着順としますが、30名を超えた場合は、劇団数が広がるよう調整させて頂く場合があることをご承知おき下さい。

劇団河童座

「ザ シェルター」 作/北村想 演出/関野順子

2009年11月21～22日 於：横須賀市立青少年会館3Fホール
2009年12月12～13日 於：相鉄本多劇場

12月13日14時の相鉄本多劇場で観劇しました。作品は近未来を思わせる、ある家族の物語。民間用核シェルター開発会社の社員が会社の命令によりシェルターのモニターとして家族(母親・妻・小学生の娘)と共に4人

で実験生活を送る事になる話。やがてコンピューターの故障で停電になり、暗闇に閉じ込められる家族。最初から余り乗り気で無かった母親を始め、家族達は昔の台風体験を語り始めるというストーリー。この芝居は、観終わった直後よりも、少し時間が立つてから「じわじわとした想いが心にやって来る」そんな感じがしました。

台風体験は誰でも一度は経験している事と思いますが、確かに怖さやワクワク感を感じた子供心は今も残っています。この作品に触れ、懐かしく思い出されました。又、ろうそくの中で過ごす時間が(核シェルターと、ろうそく生活と言う一見アンバランスなのですが)何かほのぼのとしたユーモラスな感じを受けました。私事ですが先日、風呂の電灯が故障し、ろうそくを点けて2～3日入浴する事がありましたが、このろうそくの灯りと言うのが意外と暖かく心を和ませる物でした。この作品も「ろうそくの灯り」をノスタルジックに上手く生かされていたと思います。ただ、各家族の台詞のやりとりにもう少しスピード感があっても良かったかな?そんな気がします。舞台は簡素でしたが、このストーリーには十分な雰囲気でした。客席通路も使い方も良かったと思います。そして最後に映し出された赤トンボがこの家族のこれからを感じさせる心憎い演出だったと思います。

[劇団川崎演劇塾 家守亜希子]

京浜協同劇団

「貧の意地」 原作/太宰治 脚色/蒔村由美子 演出/藤井康雄

2009年11月27～29、12月12～13日 於：スペース京浜



今年、創立50周年を迎える京浜協同劇団の出し物は、2作品とも太宰治・原作。聞けば今年は太宰治生誕100周年にあたるそうで、大いにメモリアルな公演となった。

また今回の舞台でもあり同劇団の本拠

地でもある「スペース京浜」は、最近改修工事を行ったそうで、外装の手直しのほか劇場内のトイレもシャワー洗浄付化した上に数も増設したという。こんな訪れる人達に気遣い続ける劇団の姿勢も、50年という長きに渡り同劇団が支持されてきた要因のひとつであろう。

第一部の「赤い太鼓」は、オール女性キャスト。無対象化された舞台の上で繰り広げられたのは、言わば“本を持たない朗読劇”だったのだが、聞取りやすいセリフとテンポの良さによって観る側の想像力が掻立てられ、赤い太鼓に見立てたタダの赤い布が、本当に太鼓に見えてくる。そしていつの間にかすっかり太宰治の世界の中へ……時候に合う年の瀬を描いた作品しかり、その表現手法しかり、大変心地よく鑑賞させて頂いた。

第二部の「貧の意地」も、年の瀬を題材にした作品。第一部とは違って変わってリアリティ溢れる大道具・小道具に囲まれた舞台の上で、貧しくとも気高き武士の心意気を描いた作品を主役・原田内助に扮する護柔氏を中心に、観客が笑って楽しめる芝居を披露して頂いた。この脚本を手がけた蒔村由美子さんが今年4月に病のため世界を去り、残念な事に追悼公演となってしまったそうだが、本なら15分程度で読めてしまう原作を飽きることなく30分間一気に見入ってしまう作品に仕上げられた手腕は、流石と言う他にない。

しかしながらあれだけ力のある役者さん達が揃っているのに、私個人的には、もっと貧困への切迫感と武士のプライドとが音を立ててせめぎ合うような“泣ける『貧の意地』”を観てみたかったとも思った。

[劇団「横綱チュチュ」 伊藤俊之]

劇団やぶさか

「西遊記～龍王編」 作・演出/海老原あい

2009年12月5～6日 於：相鉄本多劇場



私は「劇団やぶさか」さんの芝居を見るのが今回は初めてでした。

やぶさかさんは女子大学の演劇部が母体となった大半の劇団員が女性だとの事。以前、神奈川県演劇連盟の総会でお会いした時は、楽しく明

る方々ばかりで賑やかな劇団というイメージを私は持っていました。今回の公演作品「西遊記」はやぶさかさんが何度か公演している作品で、劇団にとって特別な作品であるという事がパンフレットに書かれてありました。

舞台は何段かに別れた段差のある独特な造り。オープニングは捕えられた孫悟空とその他の登場人物が現れ芝居が始まりました。序盤から役者の方々が舞台を広く使い、躍動感あふれる動きで物語を盛り上げていきます。その他、変身をする場面ではスモークを使うなど、セット、道具をうまく使い話を盛り上げテンポよくストーリーが進んで行くので自然に話に引き込まれていきました。

正直に言いますと、私は「西遊記」についてそれほど詳しく知らないのですが、三蔵法師一行が道中色々な登場人物と出くわし、様々なトラブルが起きる小気味よい芝居を自然と楽しむ事ができました。そして、なにより各出演者の方のアグレッシブな演技と思いきりの良さがとても印象に残りました。

セット、衣装、舞台、道具等どれをとってもこの「西遊記」がやぶさかさんにとってどれほど大切な作品であるかが凄く伝わってました。

芝居歴の浅い自分にとっても、舞台、道具の利用方法など色々とは学ばせて頂きました。やぶさかさんの次回作も是非観劇したいです。

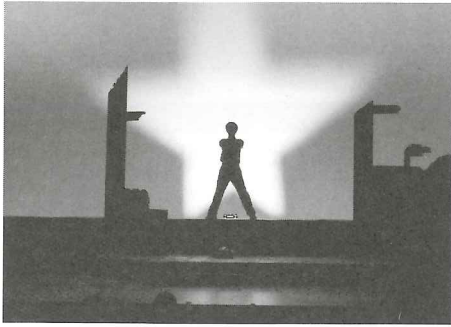
[劇団河童座 大木 崇]

劇団葡萄座

「夜曲 ～放火魔ツトムの優しい夜～」 作／横内謙介 演出／山本伸二

2009年12月12～13日

於：泉区民文化センター・テアトルフォンテ



わたしは横内謙介の作品がどうも苦手だ。横内戯曲の世界に違和感を感じているからだ。

今回の葡萄座の演目「夜曲」もその例外ではない。

横内謙介と彼の劇団善人会議にとって、この作品の公演は画

期的な成功を収め注目された記念すべき舞台だった。初期の代表作とされる作品である。

なぜ苦手なのか！ 現在と過去の「侍社会」のあいだをタイムスリップ、ワープする劇の構造にわたしがついていけないからだと思う。いまの若者演劇ではごく普通の表現方法かもしれないが旧世代のわたしにはなんとも親しみ難い居心地の悪さがある。

そんな訳でわたしのこの劇を観る視線はすこしゆがんでいるかもしれない。横内の作品は夜はじまり、つまり夢の世界、多くは

悪夢が主人公を混乱に陥れ、夜明けとともにおわるものが多い。「夜曲」の主人公ツトムは新聞勧誘員をやっているが他人とコミュニケーションがうまくできず居場所を見つけれない若者である。彼にとって唯一、生きた瞬間を感じることができるのはマッチを擦って放火を行い花火のように炎が舞い上がるときである。放火魔こそ彼を「生きさせる」のだ。封印された廃墟のオバケ幼稚園に放火したことで侍社会が出現お家騒動に巻き込まれる。夢の世界でもみくちやにされたツトムは現実世界の戻るためにもう一度マッチを擦らなくてはならない。夜があけて、また日常の世界が待っている。

葡萄座の舞台がこの夢の世界を起動する「入れ籠」の仕掛けをどのように表現するのかという興味があった。残念だが夢と現実ふたつの世界をくっきり映し出しているとはいえなかった。ツトム役を演じた斎藤佳太郎さんの演技はよく言えば素直な役づくり。しかし、ふたつの世界を意識的に表現しているとは見えなかった。だからこの劇で何を訴えようとしているのかわからなかった。斎藤さんはこれからの新人である。この舞台での経験が将来大きく開花することを期待したい。

〔横浜小劇場 荒井賢一〕

劇団蒼生樹

「御存知 遠山藤之丞一座 奮闘記」 作・演出／濱田重行

2009年12月12～13日

於：横浜にぎわい座・芸能ホール



この遠山藤之丞一座の演目が劇団蒼生樹として最後の舞台となる。当日頂いた資料に25年の公演記録が2ページにわたり全て書かれていた。ほとんど観ることが出来なかったことに大きな後悔もした。もともと旗揚げ公演

の年に私は5歳だったのだが…。この25年の長い歴史に幕を閉じるその瞬間に立ち会えたことに観劇する前から感慨深いものを感じ、開演を待っていた。だが、そのどことなく切ない気持ちは開演とともにすぐにどこかへと遠のいていくことになった。舞台は江戸の下町。姉妹が営む小間物屋の窮地を遠山藤之丞一座が一芝居打って解決していく人情話。しかし、この時代劇は一筋縄ではいかない。舞台が開演した瞬間に登場する悪の主演となる新興宗

教「幸福伝来教」が胡散臭い。教祖の側近二人も教祖が行う行為全てが胡散臭い。また、小間物屋を訪れる全ての人間が胡散臭い。そう、この芝居は胡散臭いのである。だが、それが心地いい。観ているお客はこの胡散臭い芝居を真剣に演技する役者に目を奪われ惜しみなく拍手し、笑う。演技なのかアドリブなのかかわからないところや子供が登場しておひねりを貰うところなど客と舞台が一緒になって楽しく盛り上がっていく。そして、遠山藤之丞一座がどうやって解決するのかを心待ちするのである。物語が単純明快だからこそ面白くするのは難しい。そこに演出は現代の言葉や政治を織り交ぜることによってより分かりやすく観やすい時代劇を創り上げた。この芝居に完全な悪はいない。汚い台詞も登場しない。

誰もが楽しめるようにという強い思いを幕が下りる最後まで感じ取れる芝居だった。

蒼生樹は解散、いや快散する。次回作も期待するなどと言えないが、カーテンコールで遠山藤之丞は言っていた。「また、お会いすることがあるかもしれない」と。今は心待ちにしたいと思う。

〔演劇プロデュース「螺旋階段」 緑慎一郎〕

Ultimate Games (ラゾーナ川崎プラザソル3周年記念公演)

「COUNTINUE」 脚本／伊藤裕一 演出／天野高志

於：ラゾーナ川崎プラザソル

近年「県演連」への加盟劇団が急増している。風雲かほちやの馬車に始まって劇団やぶさか、螺旋階段、そしてラゾーナ川崎プラザソルである。

これは演劇博覧会の地道な積み重ねや、芝居塾という新しい演劇創造への試みなど、外に向って開かれた活動を展開してきた連盟の成果が、具体的に実を結び始めたと言っているだろう。

神奈川県の演劇史が、新しい時代を迎えていると言える。

さて、その「ラゾーナ」だが、劇団としての加盟ではなく、劇場として加盟している点で、ユニークな存在である。劇場を運営しているスタッフは全員現役で小劇場や商業演劇などでも併行して活躍している演劇専門者である。そのスタッフ集団が「ラゾーナ」という劇場を通して、県下の演劇ネットワーク造りに寄与したいという主旨のようだ。

様々な可能性が期待できるし、今後が楽しみな加盟である。

肝心の舞台であるが、4日は千秋楽ということもあってか、約200名の客席は若い人で満席。60代の私などは気後れする。スタッフ集団のプロデュースというだけあり、音響、照明、映像、装置と圧倒的迫力で客席に迫ってくる。加えて俳優諸氏もラゾーナ開設三周年、満を持して馳せ参じたという様子が何え澁刺として躍動感にあふれている。上演時間2時間の約3分の1はバトルシーンであり、よく訓練された見事な殺陣で魅了する。

しかし「COUNTINUE」内容がよく解らない。帰宅して「芝居に登場する用語の解説」を読んでも解らない。「劇評担当者を誤ったか？」と後悔してもあとの祭であった。

従って「劇評」と言うよりも加盟歓迎の意が強いものとなった事、ひらにご容赦。

〔京浜協同劇団 藤井康雄〕

演博はまだまだ発展の余地がある?!

第7回神奈川演劇博覧会

会場＝神奈川県立青少年センター多目的プラザ

今回で第7回を迎える神奈川演劇博覧会は、2004年2月相鉄本多劇場を会場としてスタートしました。当初の参加劇団数は6劇団、それぞれが1回の公演でした。参加劇団だった劇団横綱チュチュはその後連盟に加盟しましたが、現在連盟内で最も活気のある劇団の1つで、このところ順に力を付けています。

「出入り自由、定時開演、無料」は当初から続くこの催しの売りですが、これは最初にこの企画を提唱したG/9プロジェクトの佐藤代表が、STスポットで発足した「スパークリングシアター」が途中から企画内容を変えたことを残念に思い、県演連企画として再度「誰もが演劇の楽しさに触れることのできる催し」として実現したものでした。相鉄本多劇場という立地条件も加味して「これまで演劇を見たことのない人びとへ、ふらっと立ち寄れる演劇公演」も売りでした。映画帰りのこれまで演劇観劇とは無縁だった人たちへのアピールでもありました。第2回からは出演劇団の公演数も2公演ずつと、演る側の意欲を充たすものと進化させていき、希望劇団も徐々に増えていきました。第4回からは会場を神奈川県立青少年センター多目的プラザに移し、心配された「演劇と無縁の人の立ち寄り」ですが、出演劇団の努力で克服し、集客はうなぎ登りに増えていきました。

第5回にはついに参加希望劇団が21を数え、抽選で出場を決める発展振りを示してきました。そして、その第5回に参加の「風雲かぼちゃの馬車」、第6回に参加の「演劇プロデュース『螺旋階段』」「劇団やぶさか」は博覧会参加後に連盟に加盟しました。着実に博覧会という企画は、県演連の組織拡大に大きく貢献するものとなっています。

神奈川演劇博覧会には「参加資格」というものがありま

す。「神奈川県内を中心に活動している劇団、または個人」というもので、神奈川県内で活動していれば、キャリアに関係なく参加できることをアピールして募集をしてきました。これまでに多くの劇団に出演して頂いてきましたが、出演劇団の活動地域をみてみますと、横浜・川崎・横須賀・鎌倉・藤沢・平塚・小田原・大和・秦野、ということになります。しかし、その多くは横浜・川崎であって、圧倒的に県央地域からの参加が少ないという傾向が見えてきます。そのことは神奈川県内において、横浜を中心とする演劇情報が、県央地域には余り伝わっていない、ということを示しているものでしょう。また逆も然りです。しかし、確かに県央にも演劇文化は存在していますし、われわれがまだまだ把握できていないだけとするなら、「神奈川県内活動」が基本で「劇団間の交流」が主旨でもある県演連企画演博にとって、県央地区の劇団への参加呼びかけはこれからの必須課題であり、出演は更なる大きな前進になると思われます。そう考えると、希望劇団多数の場合の抽選方法に、地域性、を持ち込んで選択するものも有りかも知れません。情報をご存じの方がいれば是非とも事務局にお教え頂きたいです。

今回の出演劇団は下記のとおりですが、初出演は5団体のみで、残る9団体のうち、前回出演したのは8団体。つまりリピーターが多数手を挙げてくれている、ということになるんですね。また、初出演の5団体も、昨年(2009年)旗揚げの劇団から、安定した人気を誇る劇団まで、新たなアクセントを加えてくれるでしょう。毎回考えることなのですが、今回もこれまでとは違った演博をお見せすることができそうです。乞うご期待!

[神奈川演劇博覧会実行委員長 関口素実]

●2010年3月20日(土) 11:30～

出演＝劇団AKIO・劇団「特別天然危険物」・劇団やぶさか・劇団お座敷コブラ・ライト・トラップ

●2010年3月21日(日) 11:30～

出演＝演劇プロデュース『螺旋階段』・劇団Human Dust Union・劇団四ツ葉屋・劇団PPP・劇団くろひげ

●2010年3月22日(月・祝) 11:30～

出演＝芝居屋・劇団きさく座・湘南アクターズ・The 新茶

神奈川県演劇連盟加盟団体の記録 (50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』 ●京浜協同劇団 ●劇団蒼生樹 ●劇団蒼い群 ●劇団河童座 ●劇団かに座 ●劇団川崎演劇塾 ●劇団きさく座
- 劇団こゆるぎ座 ●劇団ひこばえ ●劇団葡萄座 ●劇団麦の会 ●劇団やぶさか ●劇団横綱チュチュ ●風雲かぼちゃの馬車
- 横須賀市民劇団プロジェクト ●横浜小劇場 ●ラゾーナ川崎プラザソル ●ラ・テラ ●G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/> 演劇資料室HP: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/>